俺と世界と電視の力

レイアン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺と世界と電視の力

【Ｎコード】
Ｎ２３０４Ｗ

【作者名】
レイアン

【あらすじ】
高校生である倉本夢二は台風が来たことにより、学校が休みになったことを利用して、友人と映画を見に行った。
だが、不幸にも彼は、帰り道、雷の直撃を受けてしまう。
目が覚めたとき、見ることが出来たのは、天井と何かの数字、それと一緒にある矢印。それは、電気だった。そう、彼は電気を見る力を宿したのだった。
この世界は電気なしでは成り立たないものとなっている。
それはつまり、電気を統べることも可能なこの力は、世界に大きな

影響を与えることが出来るものであるということを指している。
彼はそんな力をどのように使うのか・・・

プロローグ　異能が宿りし日

セミが一夏の命をかけて鳴くそんな真夏の日。
大型台風九号が大阪を直撃した。南の沖縄よりずっと東の位置で発生し、それはもう、見事なまでに大阪に向かって一直線に。
それによる影響によって、当然ながら、暴風警報が出て、高校はもちろん休み。
俺は、突然訪れた休みを友人と出かけて、映画を見に行くことにした。
学校側からしたら、家で自習しとけという話なのだろうが、そんなことは関係ない。休みは休みらしくエンジョイしなければ。
しかも、風は強いが、雨は降るどころか、ところどころ青空が見えているぐらいなのだから、これを使わない手はない。
「これで、学校休みかよ。最高じゃねぇか。なぁ、黒瀬。」
「・・・。」
おや、返事がない。それにやけに静かだ。そう思いながら、左を見てみる。すると、そこには、自前のノートパソコンを使いながら、自転車に乗る俺の親友がいた。
使いながら？
普通なら、ありえない状況だ。だが、この場合、片手でやってるのなら、まだ頑張ればうなづける。だが、こいつは違った。さも当然のように、両手を使い、タイピングをしているのだ。
「あの・・・。黒瀬・・・。お前、大丈夫か？」
「ああ、大丈夫だぜ。」
そう言いながら、道にある鉄柱なり、人なりを体を傾けたり、時には片手を使って、避けていく。やつの手は止まることはないし、ディスプレイから、目を離してもいない。
この場合、明らかなことだが、なにか事故を起こしてしまったら、やつの前方不注意が原因となってしまう。だが、なぜか、今のとこ

ろ、事故を起こしてはいない。本当なら、全力でとめるべきだろうが、こいつのパソコン好きはとめられない。
そんなことを思い出した俺は、あえて、何もしないことにする。
そんなふうに、事故の心配をしつつも、自転車を走らせていると、案の定、隣から何かに、衝突した音が聞こえた。
「おい、てめぇ。前を見ないで、パソコンを見ながら、自転車とはどういうことだ。」
自転車を止め、斜め後ろを見てみると、不良に絡まれる黒瀬の姿がそこにはあった。俺はすぐに、謝りに行こうと駆け寄ろうとするが、俺よりも速く動いたやつがいた。
黒瀬唯。名前から分かるように、やつと彼女は兄妹だ。普段、おとなしそうで、かわいらしい笑顔を振りまく彼女だが、今の彼女にそんな優しさやおとなしさは全くもって感じられない。
今、彼女から感じられるのは怒り、いや、冷え切った鋭い殺気。
「お兄様に、けんかを売るとはいい度胸をしていらっしゃいますね。」
「ああ、何だ、てめぇは。部外者は引っ込んでろ。」
不良たちは、突然現れた邪魔者を排除しようと動き出す。数は三人。普通の少女なら、こんな状況を目の前にしたら、恐怖に駆られるだろう。
だが、唯の目には哀れなものを見るような蔑みの光しかなかった。
我ながら、他人とはずれていると思う俺から見ても、普通とは明らかに違う少女だと思う。だが、そんな外見は彼女にとって、はっきり言って、どうでもいいことなのだろう。結局のところ、彼女にとって重要なのは、目の前にいる兄に対して、無礼なまねをしたものどもを排除することなのだろうから。
彼女は、親指と人差し指の間に、パチンコ玉を挟み込んでいく。それに、徐々に力を込めていき、一気に弾き飛ばしていた。不良たちに向かって。正確には、命令を出したやつの顔をギリギリ掠めるところを。

男の顔には、一筋の血が流れる。怒りで我を忘れ、真っ赤に染まった男の顔が、急激に青ざめていく。
もう、終わりだ。それを見ていた俺は、そう確信し、安心する。安心するって言うのは、相手から戦おうという意志が消えてくれたことに対してだ。
じゃなければ、俺が無理やり介入せざる終えなくなっただろう。かといって、今、介入しなくて大丈夫かといわれると、そうでもないのだが。
あの妹の怒りはまだ冷めてはいない。冷めるどころか、どんどん上がってきている。そんな唯を出来る限り速く移動させるべきだと俺は判断した。なぜなら、そうしなければ、彼女の怒りがいつ爆発してもおかしくないからだ。
「黒瀬兄妹、行くぞ。そちらの皆さんもそれでよろしいですね？」
選択肢は一つしかない質問を男たちに投げかける。
その問いかけに対し、男たちに出来たのは、ただうなずくだけで、声をだすことはなかった。いや、発することができなかったが正しいか。しかし、それは当然のことだろう。
死の気配を感じて、何事もなかったかのごとくいられるほうがおかしい。
そんな恐怖に支配された男たちをそのままにして、俺たちは映画館に向かった。
ちなみに、唯の怒りはというと、彼女の兄に諭されたことにより、映画館についた頃には完全に静まっていた。
見た映画は世界を魅了したファンタジー映画。なかなかの出来で、続編が出たら、見てみたいところだ。
最後に、スタッフロールが流れると、映画は終わった。
「次はどこに行く？」
映画館の天井にある明かりがつき始めたとき、俺は二人に対してそう聞いた。だが、返事はなかった。
兄弟の方を見てみると、妹は兄の肩に寄り添って、兄は妹のほうに

頭を傾けて、どちらも爆睡していた。二人とも、安心しきった幸せそうな寝顔を見せていた。
この幸せな顔を見ていると、起こす気が半減されるわけだが、それでも、人がほとんど出て行ってしまったので、起こすことにする。
そして、そうしようとしたとき、兄の方は目を開き、起き上がった。
「おはよう、夢二。」
「おはよう、明。そろそろ帰るから、そこの妹さんを起こしてくれ。」
「いや、起こすのはかわいそうだろう。こんなにもぐっすり寝ているんだから。俺が運んでいくよ。」
「そうか、でも、大丈夫なのか？」
「ああ、両手なしでも運転できるからね。」
「いや、事故を起こしていたじゃないか。」
「ああ、あれね。あれは、向こうが当たってきたから、ぶつかっただけだ。あいつらは、俗にいう当たり屋みたいなものだろう。」
「そうか、わかった。でも、気をつけろよ。」
「ああ。」
ちなみに、今の会話の大丈夫かという言葉には、妹さん起きたら、嬉しさのあまり失神するぞという意味も含まれていたのだが、気にしないことにしよう。
そして、俺たちは席を立つ。やつは、妹をお姫様抱っこと呼ばれる持ち方で静かに持ち上げる。そんな姿に色々思うところがあったが、あえて、口には出さず、心の中にしまいこむ。
彼は三月生まれで、妹のほうは四月生まれということで、学年自体は一緒なため、そこまで身長差はない。だが、そんな妹抱えつつも、普通に歩いている友人の姿に俺は驚きを隠しきれなかった。
もちろん、そんな異様な光景を見て、注意を引かないわけがないので、周りからの視線が痛かった。だが、それは本来、明のほうに行っているはずで、俺には関係ないはずなのだが、何故か俺に対しても視線が集まっていることが不思議でならなかった。

そして、映画館を出ると、朝の天気が嘘のように見渡す限り、分厚い雲に空が覆われていた。
「お前、妹さん抱えて、先に行っとけよ。俺が妹さんの自転車も持っていくからさ。」
「いや、悪いって。そんなことさせちゃ。」
「こういう俺のたまにしかない善意はちゃんと受け取れ。それが俺からのお願いだ。」
「・・・。ああ、分かったよ。」
納得していない様子だったが、俺は気づいていない振りをする。そうして、両手に妹を抱えたまま、自転車をこいでいく友人を俺は見送った。
とりあえず、俺は唯の自転車が幸運なことに折りたたみ式だったので、小さくしてから、背中にひもで背負う。感想としては、思っていたよりかなり重い。その一言に尽きた。
ここから、家まで十キロ。これを背負ったまま、俺はたどり着けるのか、否、たどり着いてみせる。
そう決心して、気合で、こいでいく。こぐたびに、背中と足が悲鳴を上げる。こぎ始めて、もう三十分ほどが経過したが、まだ半分しか進めていない。だが、背中は今にも崩壊しそうだ。
疲れ果てて、息切れを起こしながら、こいでいると、雨が少しずつ降り出した。
「やばいな。ようやく、台風が働き出したか・・・。」
小雨だったのは、ほんの一瞬で、すぐに大雨に変わった。朝から天気が良かったので、傘など持ってきているはずもない俺はずぶ濡れになりながら、進んでいった。
無論、雷も鳴っていた。かなりの轟音。普通だったら、これが聞こえない人はいない。
だが、俺には雷の音が聞こえるわけではなく、そして、視界に雷を認識するのでもなく、全身に流れる莫大な電流を感じることしか出来なかった。

俺に雷が直撃・・・したのか。
俺、死ぬんだろうなぁ・・・。
すまない。明、唯・・・。
そう思いながら、俺の意識は漆黒の闇の奥底へと落ちていった。

プロローグ　異能が宿りし日（後書き）

俺と世界と電視の力、スタートです。
この物語は、日常を生きつつも、一般では、非日常といわれるようなふうにも生きている少年の姿を描いたストーリーとなっています。
読んでいただいて、感想等ございましたら、お気軽に書いていただけるとうれしいです。

反乱の兆し

俺が目覚めたのは、どこか白い天井があり、白い壁に包まれた部屋であった。見覚えのない部屋で、最初は死んだのだろうと思った。だが、意識がしっかりしてくるに連れて、自分がベッドに寝かされているのに気づいた。どうやら、生きているようだ。

「北井大尉、大丈夫か。」

「はい、山崎大佐。」

突然の呼びかけに心の中は驚きが隠せなかったが、難なく乗り越えることが出来た。ベッドから起き上がり、敬礼をして、俺はそう言った。もう慣れたものだ。俺の目の前にいるのは、軍服に身を包んだ男だった。

「そうか、ならいい。医療班に全力を尽くしてもらったからな。感謝しとけよ。」

「そうですか、あとで、お礼を言っておきます。一つ、質問してよろしいでしょうか。」

「何だ、話せ。」

「目に何か異常を感じます。何やら、数字や矢印が見えますし。」

そう、起きたときから、気になっていたこと。この数字と矢印。今、数字は百で矢印は左のほうを向いている。

「それは、医療班の検査の結果から見ると、異能だそうだ。具体的には、電気の流れ、および、強さが分かるらしい。そして、その異能の兆候が目だけではなく、全身のいたるところから、観測されている。だが、今、分かっている効果は目の部分のみだ。」

「ありがとうございます。」

「今回、君をここへ連れてきたのは、この会話のためだけではない。」

「何かございましたか？」

「ああ、今、この大阪に、異能を持つ者たちが続々と集まりつつあ

る。」
異能、軍だから、部隊として存在するが、一般には異能の存在は隠され続けている。それは、異能の存在が世界をゆがめかねないという政府の判断によるものだ。異能が公式に認められてしまえば、異能を持ち、人より上に立った気分となる者も出てくる。それは、たちが悪ければ、人を見下すという行為に至りかねない、それが政府の予測だ。今の場合は、もし存在していても、異能保持者自身、周りから差別を受けてしまうことが目に見えているから、異能を隠そうとしている。
そう、自分だけがそうなのだろうと思わされているから。だから、異能保持者自身が、公に使おうとしない。
だから、世界はまだ安定している。
これが、異能の存在が公のものになったら、どうなる？人を見下すで済んだらいいほうだろう。これは、俺の見解だが、第三次世界大戦が起きる。異能保持者たちの反乱が始まりしたものとして。
そんなことを露知らず、異能保持者たちは、集まって、異能保持者の存在を公に知らせ、自分たちの存在を認めさせようとしているのだろう。おそらく、人数がそろえば、認めてもらえるとでも思っているのだろうが、本当はその逆だ。
人は未知なる力に恐怖する。それが数が多くなればなるほど、大きな未知の力となる。それでは、認められるどころか、恐れになるだけだ。
「だいたい、状況が分かりました。おそらく、異能保持者たちの反乱目前といったところなのでしょう。ですが、どうしてそうなってしまったんですか？」
「察しが良くて助かる。だが、その原因に関しては、現在捜査中だ。」
だとするならば、俺は何故呼ばれた。考えろ、考えろ、俺。
「了解です、俺が呼ばれたのは、異能保持者たちの反乱についての調査、および、反乱の鎮圧といったところでしょうか。」

「ああ、そうだ。いつものことながら、話がよくわかっているな。まるで、私の心の中が読まれているようだ。」
「了解です。情報が分かり次第、報告します。」
「ああ、よろしく頼む。それと、倉本。」
久しぶりに本名で呼ばれた。久しぶりにというのは、この人が俺の本名を呼ぶときはプライベートの内容のときだけだからだ。
「何でしょうか。」
「あせりすぎるなよ。まだ、お前は若いんだ。」
「分かりました。とは言え、俺が進まなければならないのは事実です。そして、今はあせらなければならない時期です。では、失礼します。」
俺はあえて、山崎の言葉の持つ本当の意味から目を背けた。だが、それはたとえ、どれだけ目を背けたとしても、迫ってくるものだと俺は知っている。
だとしても、俺は目を背けたかった。目を背けたら、いつか消えてくれるのではないかと思って。
そう言って、一礼し、俺は山崎に背を向けると、自動式のドアから出て行った。

遠距離ゲート

だが、その自動ドアを抜けた先はよく見慣れた俺の玄関だった。
突然のことに驚いて、後ろを見る。すると、ドアの向こうには佐原大尉がいて、笑いながら、こっちを見ていた。
「試作機としては上々の出来栄えじゃないの？これ、なかなかいい作品だと思うわよ、北井大尉。」
通りすがりで目撃したら、十人が十人振り向くほどの美人さんが、微笑みながら、腕に巻いた機械を指しながら、言う。
最初に会ったときは、こんな一つ一つの仕草にどきどきさせられたものだが、今は見慣れたことによって、大丈夫になった。
そして、そんな彼女が腕に巻いている機械は、試作品として作ってみた遠距離移動用のゲートを作る機械で、そろそろ、実際に使ってみてもらおうかと思っていた品だ。
おそらく、まだ、エネルギー供給の部分が不完全だから、充分な動作はしないと思っていたのだが。
なんと言っても、部隊の長である大尉だ。エネルギーの量は一般と比べても、はるかに違う。そもそも、そのエネルギー量の多さも大尉の任命条件でもあるから、普通と比べぃいけないのかもしれない。エネルギーの供給不足で、動かない可能性もあると考えていたが、まぁ、この人のエネルギー量から考えれば、当然の結果だろう。
「いえいえ、まだ、それは不完全な品ですよ。あなただからこのゲートを維持することが出来るが、他の人は無理だ。まだ、エネルギー供給のところが修正すべき点があります。ですが、ここまで、安定してゲートを開くことが可能というのも、結果としてはいいものです。ありがとうございます。」
あごに手を当てて、少しだけ考える大尉。だが、それはほんとに少しの間だけで、会話が途絶えることはなかった。
「ふーん。でも、これはこれで、相当なものじゃないの。正直、こ

れだけのものを維持しようとすれば、これぐらいのエネルギーは必要なのは当然だろうし。こんな試作品を作り上げて、問題点を解決できるような口ぶりで話すあなたはすごいわ。」
「ありがとうございます。わざわざ、俺のためにゲートを開いてもらって。でも、まだ、不完全な品なんで、そろそろ、こことのゲートのリンクを切ってもらえると嬉しいです。まだ、そこまで、無理はさせたくはないので。」
「ええ、わかったわ。あなたがそう言うのなら。じゃあ、さようなら、そして、おやすみなさい。」
「さようなら。そちらも、おやすみなさい。」
そうお互いに言うと、ゲートは閉じられた。そこに広がっているのは、もう、いつもの玄関。ゲートがあったなんて、痕跡は微塵もない。それを確認してほっとした。
「原理的にはＯＫか。だとするなら、残りの問題はエネルギー面だ。だが、ここで、考え始めたら、徹夜確定だろうから、今日はとりあえず、ここまでにしておくか。」
とりあえず、ここまでと区切りをつけることにする。それを考えるのは、また今度だと。

電子の王

そこで、俺は玄関にいることに気づく。
「ただいま。」
「おかえりなさい、夢二さん。」
そう言って、声をかけてくれたのは、仕事で、俺とは別居している両親に代わって、ときどき家まで料理を作りに来てくれたり、掃除しに来てくれたりする心優しい後輩の加藤麻利。
「ああ、ただいま。」
「そういえば、夢二さん。今日学校休んでたみたいですけど、どうしたんですか？」
「ああ、雷が俺に直撃して、死に掛けた。」
そう告げると、彼女の顔から血の気が引いていく。それはもう、ほんとに心配している顔で。
「あわわわわ。だ、大丈夫なんですか。ど、どこか、お怪我は、異常が見られるのであったら、言ってください。」
「ああ、大丈夫だよ。異状って言っても電気が見えるようになったぐらいだし。」
彼女の顔に、徐々に血の気が戻っていき、蒼白だった顔も、いつもどおりに戻っていった。
「良かったです・・・。電子の王とまで呼ばれている先輩に電視の力なんて、鬼に金棒ってやつですね。」
「電子の王って、大袈裟な。俺は、趣味でやったものを公開してるだけなんだから。」
「それの素晴らしさゆえに、あなたはネット上ではその名で呼ばれているのですよ。突如現れた顔を全く表に出さない無所属の開発者。名はルシフェル。だが、それも、ネットで出しているだけのネームに過ぎない。そして、電気の関わる品であれば、彼の作るものに勝るものはないとまで言われるようになった。」

それは知っているが、さすがにネットって言うのは、大袈裟に扱いすぎだと思う。単に、趣味の作品を公開しているだけなのに。
とりあえず、次の公開作品は、多分あのゲートに決まりだろうな。あのゲートは、異能の力をエネルギーとして取り入れることも出来るし、電気を使って動かすことも出来るから。
まぁ、表に出す上では、電気で動くというふうにしかしないが。
「すまないが、俺腹ぺこなんだよ。すぐに準備できるか？」
「ええ、というより、もう出来上がっていますよ。今回はカツカレーですよ。試作品が出来上がったと聞いて、それのお祝いです。」
そう、彼女にだけは一番初めに試作品が出来上がったことを伝えていた。
実を言うと、今回のものはどんなものを作ろうかと考えているときにアイデアをくれたのは彼女であった。
学校まで、電車とかに乗ることもなく家から直で学校まで行けるようにならないかなというささやかな彼女の言葉が今回の品のきっかけだったのだ。
だから、完成品ができたら、彼女にプレゼントしようと考えている。
ちなみに、完成品というのは、表に発表するものではない。
表に発表するのは、エネルギーとして各家庭に流れている１００？電源が必要なものであるが、俺自身の理想としては、乾電池で動かせるようにしたい。
それを渡そうと考えているのだ。
「まだ、試作品とは言え、今、使ってもらったが、どうやら成功みたいだ。あとは、エネルギー供給の問題解決をして、麻利用に使いやすくするだけだよ。」
そうこう言っているうちに、リビングにたどり着く。リビングにはちゃぶ台のような食事のための台と、テレビ関連しか置いていない。これが、俺の家だ。基本的に作業は家ではしていないので、散らかることもない。ついでに言うと、散らかるようなことは、彼女がいる時点で有り得ない。

彼女は根っからの綺麗好きだ。もし、片付いていないとか、汚れているとかあったら、自然と綺麗にしてしまうほどのだ。
「いつも、ありがとう。」
座った俺に対して、カレーを渡してくれた彼女にそう言う。
「いいえ、気にしないでいいですよ。私がしたいと思っているから、しているんです。」
彼女の気持ちが分からないほど俺はバカではない。というか、去年の冬、告白された。だが、俺には、女の人との接し方が分からなくて、今はまだ、返事を待ってもらっている状態なのだ。
そもそも、女の人に限らず、人とまともに接したことさえ少ないのだ。親はというと、仕事で小学生のときからずっと別居しているし、友達はというと、自分で家での生活を全てまわさなければならなかったので、まともに遊べなかった。それゆえに、俺は家に引きこもりがちだった。
そこで、出会ったのは、回路やプログラム。パソコンの仕組みはどうなっているんだろうとか、ゲームの仕組みはどうなっているんだろうと調べ始めたのがきっかけだ。
回路やプログラムは忙しい俺でも、家ですることができるということで、親しみを覚えたのだ。
そして、中学生の頃、彼女と出会った。俺は中学校で、電子情報部という部を立ち上げた。気合と根性で立ち上げたはいいが、入ってきたのは、彼女だけだった。
彼女に何故入ったのかを聞くと、
「それは秘密です。」
というふうな一点張りで、結局答えは聞けなかった。
それから、俺が卒業するまで誰も入ってくることはなかったわけだが、俺と彼女は二人で楽しく活動をした。
部員の数が少なすぎるということで、かなり問題にされたが、活動における成果を発表することで、その問題は自然と消えていった。
それなのに、何故、部員が来なかったかというと、二人で突っ走り

すぎたからみたいだ。はっきり言って、顧問も理解できていなかったらしいし、その時点で普通の中学生ではなかったのだと、振り返ってみると、思う。
こうして、今に至るわけだが、普通の会話は出来ても、まだ、恋とかそこらへんは全然無理なのだ。
俺自身、彼女に対して、何か思いがあるのは感じる。だが、これが、どういうものなのか分からないし、その段階で返事は、と思ったのだ。
だが、彼女が俺にとってかけがえのない大切な人であるということは彼女には伝えている。そんな俺の事情をしっているからこそ、彼女は待ってくれているのだ。
俺の返事を。
電子の王と呼ばれている俺も、一端の人間。こういうのには弱かったりするのだ。
そうこう考えながらも、俺はカレーを食べ始めたのだった。

電子の王（後書き）

すみません。作者の事情により、かなり更新が遅れてしまいました。
今後としては、来週はたぶん更新なしで、再来週には更新させてもらおうと考えています。
これからもよろしくお願いします。

魔法文字

スプーン片手に、テレビのリモコンを手に取り、テレビの電源をオンにする。そして、チャンネルを変えるのは後にして、とりあえず、カレーを口の中に放り込む。

「うまい。」

その一言に尽きた。これは、市販のものでは手に入らない紛れもない彼女がトレンドしたカレーだ。俺の好みに合わせた辛味、そして、ジャガイモ、にんじんといった野菜たちのお互いを認め合って合わさった旨みが絶妙な味わいをもたらしている。

「喜んでいただけて、嬉しいです。」

カレーを一口一口味わいながら、目をテレビへと向けると、映っていたのは、近頃起きている電車やどこかの壁に対する落書きに関するニュースだった。

「これは、学校でも話題になっていますよ。それにしてもおかしいですよね、日本語でも、英語でもない。そして、該当する外国語も見当たらない文字なんて。まぁ、字が汚くて、崩れてしまっているからってのが通説らしいですけど。」

「確かに、俺もそうだと思う。他の説として、宇宙人とか古代の未知の文明の文字だなどと言っている学者もいるが、それはまず有り得ない。」

「けど、何かがおかしい気がするんですよ。全部同じ文字で、それも、全国で発生している。同じ犯人という可能性もあったけど、同日に行われたとされるものまで出てきているし、何か組織的な動きを感じるんですよね。」

時々、彼女は鋭い。実のところ、同じことを思っていた。明らかな組織的動き。それに、大佐が言っている異能の集団が集まってきているという事実。

さらに言うなら、彼女には負担をかけたりさせるのが嫌だったから、

本当のことは言わなかったが、俺はあの文字のことは知っている。
魔法使いが使用する文字。
魔法文字。あの文字は、魔法使いにしか理解できないので、意味は分からないのだが、あれがそれに該当することぐらいは分かる。
そこらへんを踏まえると、ここ大阪で何かが起きようとしている気がしてならなかった。
「気のせいだろ。確か三年前にも似たような事件があったけど、何も起きなかったじゃないか。今回もそれみたいな感じで、何も起きないだろう。」
これは、彼女を納得させるための口実。この件にこれ以上踏み入らせないようにするための言葉。
だが、これも事実であることに変わりはない。
「確かに先輩が言うとおりですね。」
どうやら、納得してくれたようだ。まだ、何かが起きると決まったわけじゃないから、これは保険だ。
そう、何かが起きてしまったときのための。

いつもとは違う夜

そして、カレーを食べ終えた俺は、食器を洗おうとする。だが、それを見た彼女は黙ってはいなかった。
「先輩、いいですよ。私が洗いますから。」
「いや、いいよ。たまには、自分で洗っておかないとお前がいないと駄目なダメ人間になってしまう。」
「それなら、別にダメ人間になってくれた方が嬉しいです。」
俺の返しに対し、繰り出された危ない呟きに何か言わなければならない気がしたが、ここで言い出したら、おそらく、きりがないので、聞こえなかったことにする。
そして、スポンジに洗剤をつけ、泡を立てて食器を洗っていく。そうして、洗い終えた食器を置いていくと、彼女は俺と話をしながらも、その食器を拭いていく。どうやら、食器を拭くことで納得してくれたようだ。そして、その協力のおかげか、そこまで時間をかけずに、後片付けは終了した。
「じゃあ、先輩、私はここで失礼します。」
「ああ、いつもありがとう。今日も家まで送っていこうか。」
そう言って、玄関まで一緒に歩いていく。
「いえ、今日はいいです。今日は、先輩の開発した試作品を使って、帰りたいです。」
「いや、あれはまだ、試作品だから。まだ、無理だ。」
予想外の答えに心の中では驚きはしたものの、表には出さず、冷静に対処する。
「だからこそです。先輩の理論によって、作られたものが完璧であるということを私の身をもって証明したいのです。」
顔を近づけて、押し切ろうとする彼女。そんな彼女はもう言っても聞かないことを知ってる俺は仕方なく、了解することにした。
「ああ、わかったよ。」

そう言って、試作品を取り出すと、彼女に手渡す。形状としては、カチューシャのような感じであるが、頭につけるのではなく、首につけるタイプだ。通常は内蔵バッテリー使用しなければならないのだが、彼女には必要ない。
なぜなら、彼女は古代から続く血筋で、魔法使いなのだ。それゆえに、この機械に流し込むためのエネルギーの生成を自身で行うことが出来る。
何はともあれ、エネルギーを流し込んだら、声に出して、移動位置を指定するという方法か、行きたい場所を思い浮かべることで、行き先を決めるという方法のどちらかで、目的地まで行くためのゲートが開く。
「では、さようなら、先輩。」
起動ボタンを押した後、ゲートを開くと、彼女はそう言った。
「ああ、じゃあな。」
それに対し、彼女は向こうで手を振りながら、ゲートを閉じた。どうやら、今回も問題なく動いたようだ。
今の時間は２１時。
まだまだ寝るには早いし、これからどうしたものか・・・。そんなことを考えていると、携帯電話の着メロが響いた。だが、その着メロはメールが来たり、電話のときとは違うものだった。
俺の製作した防衛ネットワークの第一防衛に引っかかったことを知らせるメロディー。
それが、今響いたものなのだ。一応、千にも渡る防衛をしいているため、今、第一防衛ならば、すぐには問題はないのだが、放っておいてやるほど、俺は甘くはない。
相手はハッカーやウイルスといったところだろうから、油断はならないし、何をしても構わないだろう。
「さて、久々にやらせてもらおうかな。」
そう言って、パソコンの前に座る俺の顔には、笑顔しかなかった。

待ち合わせ

そして、次の日の朝。いつもより、起きるが遅くなってしまった俺は、軽く身支度を済ませ、食パンを口に放り込むと、足早に家を出て行った。
そして、家から走ること十分。待ち合わせ場所に着くと、麻利が待っていた。一応、時間としてはジャストだったが、麻利は十分から二十分ほど前にここに来ているのが、ほとんどのため、待たせてしまったという罪悪感が俺の中にはあった。
「すまない、遅くなった。」
「まだ、遅れていないじゃないですか。今がちょうど、七時三十分ですし。」
自分は待っているというのに、それがなかったかのように続けてくる麻利。そんな彼女の姿を見ると、本当に申し訳ないという気持ちになってくる。
「でも、先輩、いつもなら十分前に来ているのに、今日はどうしたんですか？」
そんな暗くなった俺に、気をつかってか話題を振ってきてくれた麻利。そんな彼女の気遣いを無駄にするのは、逆に失礼だということぐらいは分かるので、俺はその話題にのることにする。
「ああ、ハッカーが俺のパソコンに対して、ハッキングをかけてきたから、返り討ちにしていたんだが、気づいたら四時だった。」
「先輩も無茶しちゃダメですよ。ていうか、先輩、朝四時に気づいたらなっていたってのは・・・。一体、どれぐらいやりあってたんですか。」
「確か、二十一時ごろから戦っていたから・・・、だいたい七時間か。」
「先輩とそこまでの時間渡り合うなんて、すごいですね。そのハッカーも。」

言われてみて気づく。確かに、今回のは大物だった。
一年前、軍の情報局で少佐にもなるような人が訓練および俺に対する試験で、俺の家に勝手にハッキングしたみたいだけど、そのときは確か、第五層目に入ったところで、そんな少佐であることなんて知らずに、返り討ちにした気がする。
それに対して、今回のやつは十層まで突破してきた。だが、ここで驚くべきところは、そこまで突破してきたことだけではない。それよりも、そこまでの攻撃をしつつも、俺の自動反撃プログラムを含む攻撃を、第十層まで耐え抜いたということに驚かされた。
「確かにな。今回のやつは軍にいた少佐を裕に越えていたから、相当なものだよ。本当に、久々に白熱した戦いだったな。」
「先輩が認めるほどってことは、本当にすごかったんですね。」
「まぁ、そいつのパソコンは今頃、俺との戦いに敗れたせいで、大変なことになっているだろうけどな。」
「ふふっ。さすが、先輩ですね。」
俺の防衛ネットワークに組み込まれている反撃プログラムは、相手のパソコンをソフトウェア、つまりはプログラムの面から破壊するものだ。そして、そのプログラムによる反撃を防ぎきれなかった場合は、パソコンは起動不可の状態まで陥れる。それが、俺のパソコンに存在する触れてはいけない竜の逆鱗の一端だ。
まぁ、さすがに俺のパソコンを攻撃して来たやつに対して、無差別に反撃プログラムが襲い掛かるのは、あまりにも残酷なため、第五層までは単に、突破が厳しい防衛だけのプログラムで構成しているのだが。
「じゃあ、行くか。」
「ええ、行きますか。」
そうして、俺たちは歩き出した。ちなみに、まだ、時間には余裕はあり、そこまで急がなければならないわけではない。だが、俺は昨日まで入院していていたのだ。メールで伝えたとは言え、まだ友人たちには心配をかけてしまっている。だから、少しでも早く会って、

安心させたかった。それゆえに、俺は立ち話を、歩きながらに切り替えたのだった。

教師ＶＳ生徒

そうして、歩くこと十分。俺の通っている高校にたどり着いた。校門をくぐり、校舎に着いたところで麻利とは別れ、俺は自分のクラスに向かって歩いていった。
そして、自分のクラスに入ってから受けた一言目は
「やぁ、夢二」
「まだ、死んでなかったのですか」
「おい、聞きたいことがあるんだがな。何故、体育という科目がある？」
なんでだろうか。まともな反応と呼べるようなものを明しかしていない。あの明だけだしかだ。確かに、他の面子もおかしいことは、出会ったときから分かってはいる。だが、ここまで、おかしいとは思っていなかった。
いや、もしかしたら、俺が入院していたのが嘘で・・・。
「なわけあるか！」
「どうしんだ、夢二？」
「やはり、仮病か」
「答えてくれよ」
それでも、普通に会話を何事もなかったかのように続ける二名。それは明らかに兄と他人との態度が違う明の妹と、佳山明彦と呼ばれる完璧に室内系の男だった。
まぁ、唯のその毒舌が俺の心を読み取ったかのごときものであって、少々驚かされたわけだが。
「まぁ、いいや。とりあえず、おはよう」
「おはよう」
「おはようございます」
「ちーす」
それだけは統一性があることに俺はもう何とも言えなかった。その

後も、唯の毒舌と佳山の脈絡のない話は続き、気づけば、授業開始の時刻へとなっていた。
それは、この学校において担任とはいていないものだからだ。会うのは、その担任が持つ教科の時のみ。
無論、朝の短いホームルーム（ＨＲ）はあるわけないし、教育相談といったものも、一年に一度だから、まともに話すのはそれだけだといっても過言ではない。
そうして、気づいたら、いつものように教科担当の教師が来て、授業が始まった。
それからは、佳山は睡眠、唯はノートをとって、まじめに授業を受けていた。そして、その兄はというと、机の上にはんだごてという回路を作るために使用するための道具を用いて、何かいじっていた。明らかにこれはおかしいことだ。言っては駄目かもしれないが、寝るまではまだ分かる。だが、どうやったら、はんだづけという回路作りに発展するのだろうか。というより、電源を引っ張ってきているのだから、いわゆる盗電というものなのだろうが。
だが、そのどちらをも凌駕する問題がそこには存在した。それは至極簡単なもの。何故、教師がそれに対して、何も言わないのかだ。気づいていないわけではない。いや、確実に気づいてはいる。なぜなら、机の上で堂々なのだから。
それを教師は何も言わないまま、授業終了のチャイムが鳴ると、何事もなかったように、教師は出て行った。
「明、お前、何故、授業中にはんだづけしているんだ？」
「ああ、そういえば、夢二はいなかったのか。えっとな・・・」
それからの説明を要約していくと、こんなものだった。
明は授業中にいつもと同じように、本を読んでいた。だが、それがついにばれて怒られたらしい。そのときに、冗談だろうが、テストで満点とってからにしろと言われたらしい。
それに対し、明はその言葉を返したのだ。
「じゃあ、皆さん教師で私に対して、テストを作ってください。そ

れで、満点取れたら、文句はないですよね？」
「ああ、いいだろう」
その態度に教師は苛立ったのか、そんな約束をしてしまったのだ。
そして、その一日後、教師は各々の全力を出して作ったテストを明の前に持ってきたのだという。
「では、これを今から、百分の間に全てを解き、答えが合っていた場合は、授業中何をしても文句は言わない。それによる授業態度の減点を行わない。もし、満点じゃなかったら、授業中一切こんなことはしないようにしましょう。それで、よろしいですね？」
「ああ」
それは、実際のところ、大学院生でも解くのが難しいとされるものだったらしい。それは、言ってしまえば、大人げないわけだが、それでも、授業をまともに受けない生徒を更生させたかったのだろう。だが、彼らは知らなかった。明の底に眠る知識のデータ量を。
「解けました」
「よし、いいだろう。一時間ほど、ここで待っていろ、採点をここで行う」
だが、自信ありげだった教師は、絶望した。なぜなら、難癖のつけられるようなところすらないほど、完璧な答えだったのだ。それは、もう、高校生ではなかった。
「お前・・・。一体何者なんだ？」
「僕は、単なる一人の高校生ですよ」
そう答えて、明は帰ったのだという。それ以降、何をしても文句を言われなくなったのだという。
「おいおい、お前。先生に勝ったのかよ・・・」
「ああ、そうだよ」
そんな軽々しい答えに俺はもう言葉も出なかった。

教師ＶＳ生徒（後書き）

今回、教師ＶＳ生徒ということで、
面白いバトル（？）を描かせてもらいました。

普通なら、有り得ない。
そんな小説ならではの話でありながら、もしかしたら、有り得るかもと思わせるような話となりました。
まぁ、こんなふうに負けてしまったら、教師も何もいえないだろうなぁとか思いつつ、執筆に戻ろうかと思います。

これからも、よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2304w/

俺と世界と電視の力

2011年11月20日12時59分発行